

令和6年度 学校評価シート

学校名：和歌山県立和歌山盲学校 校長名：植野 博之

現状・進捗度	A	十分に達成している。（80%以上）
	B	概ね達成している。（60%以上）
	C	あまり十分でない。（40%以上）
	D	不十分である。（40%未満）

目指す学校像・育てたい生徒像	学校評価の公表方法
・視覚に障害のある幼児児童生徒一人一人の主体的な学びを大切に、幼稚部から高等部専攻科までそれぞれの段階で求められる専門性を生かした教育を実践します。	学校ＨＰに概要を公表する。
・自分も他人も大切に作る心を持ち、目標に向かって主体的・対話的に探究する幼児児童生徒を育てます。	学校運営協議会等で概要を説明する。
・多様な職種の教職員が互いを尊重しながら、それぞれの責務を自覚し、「チーム盲学校」の一員として活力ある学校づくりに努めます。	

自己評価（分析、計画、取組、評価）							
番号	計画・取組				評価（2月14日現在）		
	重点目標	現状	具体的取組	評価項目と評価指標	進捗	進捗状況	今後の改善方策
1	児童生徒の実態を適切に把握し、主体的、対話的で探究する視点での授業づくりを系統的に実践する。	B	実態把握の視点を整理し、客観的な実態把握に努める。単元の視点で授業づくりを行う。 年間指導計画、個別の指導計画、単元計画、指導略案の繋がりをもたせ、評価から改善までの取り組みを行う。 国家試験の合格率100%を目指す。	実態把握に関する研修を6回実施する。単元計画作成に関する研修を年3回行う。 教育計画と評価について年間3回管理職、主事、担任と外部支援者で確認し必要に応じて改善する。 個に応じた学習支援を行い、国家試験受験予定者4名全員の合格。	A B C	自立活動における実態把握をテーマに8回実施した。単元計画の様式に関する研究を進めるとともに、単元計画の概要や作成作業を含む研修を3回実施した。 教育計画と評価について主事、管理職の確認は年間3回行った。外部支援者と協議は1回実施し、授業づくりについて助言をいただいた。 補習等も実施し学力向上に向けて取り組んだ。	【単元計画】年間指導計画、個別の指導計画と単元計画をより連携させ、授業にフィードバックさせることで授業力向上に繋げる。 【授業研究】自立活動を視点としたテーマで研究協議を行う。外部の方に助言を頂くことで授業力、専門性の向上を図る。 【国家試験】よりよい授業に向けて改善を図るとともに、学力向上に向け個々の状況に応じた対応を充実させる。
2	視覚障害の特性を踏まえた教科指導や重複障害児指導、理療科指導について理解を深め、専門性の維持、継承を図る。	B	教科会を中心に、教科指導での配慮点や指導についての共有を行う。 視覚支援センターによる校内支援を充実させる。 盲学校勤務経験の少ない職員への研修実施を継続する。ICT支援員を活用しICT機器の有効活用を図る。	年6回教科会を実施し、より児童生徒がわかるための指導面での共有等を行う。 全生徒に関する実態把握や授業改善等についてセンターや担任、他の教員等との協議をし、必要に応じて改善する。 盲学校勤務3年以内の教員に対する研修を年間7回実施する。ICT支援員による支援を各学部で実施する。	B B A	拡大教科会を4回実施し、教科を越えて視覚障害に対する指導のポイントを確認し、また教科会を7回実施し配慮点を確認、共有した。成果をサポートブックの作成に繋がった。 学部会等で担任の困り感を集約し、実態を共有した。その上で研修やケース会等にセンター職員が入り、課題解決に向けた対応を行った。 基礎的知識や授業計画づくり等の研修を3年以内の教員対象に8回実施した。ICT支援員が教員のICT活用の支援を行った。クラウド型授業支援アプリの活用やデジタル図書の利用拡大に繋がった。	【教科】教科会をより活性化させ、指導計画の作成、評価、指導内容の検討する組織とすることで教科学習の専門性維持と継承に繋げる。また教材や考査等の資料保存を行う。 【センター】校内支援と校外支援の往還を大切にする。校内支援におけるセンターの役割や取り組みを明確にし、計画的に実施していく。 【ICT】視覚障害に対する支援としてICTの効果は大きいため、今年度の成果を踏まえ、ICT機器の活用やICTスキルの定着に向け取り組みを広げる。
3	外部との連携 学校運営協議会等の活用や地域との連携を深め、本校の取り組みの発信や、本校幼児児童生徒が学校外での活動を通じてよりよく生きる力の育成を図る。	B	関係機関と連携し、視覚支援教育についての専門性や実践を整理する。 高等部生徒を中心に、企業や公的機関と連携し実習等を充実させる。重複障害生徒の進路先拡大に向け、必要な情報を整理する。 生涯スポーツ等への取り組みを充実し、各種大会等に積極的に参加する取り組みを行う。	「視覚支援サポートブック（仮称）」を今年度内に作成する。 高等部生徒について、企業等での実習機会の拡大を行う。 校外への大会等に年間5回以上参加する。	A B A	3月完成予定。これまでの実践や現在の到達点を整理して記入した。 教員の進路研修や保護者向けの研修会を実施した。ヘルスキーパーの開拓や企業等と連携をとることで学校見学等関心を持って頂くことができた。理療科は県内企業やロハスフェアで施術体験をした。 近畿盲学校体育連携主催の大会に4回参加（フロアバレー・ゴールボール・卓球・水泳）、県障害者スポーツ大会に参加した。	【視覚支援サポートブック】校内での学習指導や支援に活かすとともに、センター的機能における校外支援等でも活用する。 【進路指導】関係機関と連携しながら、重複障害生徒の進路先に関する課題整理を今後行う必要がある。

学校関係者評価（2月14日実施）
教職員評価より
・様々な体験学習等が活発に行われている。
・保護者・家庭と連携を図りながら、教育活動が行われている。
・地域の小・中学校等（幼・保・高を含む）への支援センターとしての機能を発揮している。
・視覚障害者に対する支援センターとしての役割を果たしている。
・寄宿舎において、各ブロックや学級担任また、保護者と連携を取り、自立支援等に取り組んでいる。
・生徒（幼児児童）の実態を踏まえ、全教職員による組織的・計画的な取組をより進めていく必要がある。
保護者評価より
・幼児児童生徒は、明るく生き生きと学校生活や寄宿舎生活を送っている。
・幼児児童生徒は、お互いに理解し合い、協力して学校行事等に取り組んでいる。
・児童生徒の健康や安全、体力づくりに関する指導が適切に行われている。
・校舎、校庭、教室の環境美化や整理整頓をより進める必要がある。
学校運営協議員より
・年間指導計画や単元計画などの授業計画は作成だけでなく活用することで、こどもが変わること、こどもの様子がフィードバックできることが大切である。
・福祉や就労の制度は日々改定されている。情報を得ておくとともに必要な機関と連携しておくことが大切である。
・ICT機器は今後社会での必需品となる。
・学校は校内だけでなく、関係する人や機関と連携しながら教育活動を進めていくことが大切である。

